

経済発展階段説

——独逸旧歴史派経済学における——

赤羽 豊治郎

I

普通に経済階段説というは、「数世紀を通じて、経済が経過した過程をその多様さと見通し難さのなかで、静止した部分・静止した状況（階段）を想定し、それらを互に引き離した接触させながら、明確にする理論」（ヘルマン・ケレンベンツ）をいう⁽¹⁾。このような階段説の理解は経済過程の動きを単に年代的・継起的に記述するだけに満足せず、各階段に内在する経済の実体認識を獲得し、改めて各時代の実相を追求する。進んで将来の経済の動きに一定の方向を与え、各階段を通ずる歴史法則を樹立するにある。しかも、この最後の主張は経済階段説がその成立期において、かのフリードリッヒ・リストが組織したものであり⁽²⁾。今後もその重要性を看過すべきでない。

かくみると、経済階段説の研究は(1)その形成期にまつわる実践的志向に基くものと、(2)この世紀の始めマックス・ウェバーによつて各経済階段の実体認識の客観性を問題とした理念的把握とその後の発展とに分つことができる⁽³⁾。しかも、階段理論のこの種の類別は実に階段説そのものの形成発展の過程の反映であり、別して独逸経済史学の方法論的純化の発展に即応せるものであつた。

- (1) Hermann Kellenbenz, *Wirtschaftsstufen*. Hwb. d. Sozialwiss. 44 Lief. Göttingen. 1962. S. 260.
- (2) Friedrich List, *Das Nationale System der Politischen Ökonomie*. Sommer's Ausgabe. Tübingen. 1959. 正木一夫・谷口吉彦両氏共訳、「国民経済学体系（改造文庫）昭和16年および拙稿「フリードリッヒ・リスト」信州大学文理学部紀要，第10～11号。
- (3) Max Weber, *Die Objektivität sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis*, in *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*. Zweite Aufl. Tübingen. 1951. SS. 146-214.
Artur Spiethoff, *Die Allgemeine Volkswirtschaftslehre als geschichtliche Theorie*. Die *Wirtschaftsstile*. Schmollers Jahrbuch. 1932. SS. 891-924.
Walter Eucken, *Die Grundlagen der Nationalökonomie*. Jena. 1940.
- (4) 板垣与一氏、「経済段階理論の問題とその展開」同氏「新版・政治経済学の方法」昭和38年，317頁以下。

II

経済階段説の芽生えは古典古代に遡ることができるという。アリストテレス(384—322B. C.)の遊牧—狩獵—牧畜—農耕の発展段階、或は紀元前36年にローマのワルロ Varro (116—

127B. C.) が希臘の統計家ディケルク Dikäark (300B. C. ごろ) の先蹤に倣い経済発展を三階段(野生・牧畜および農耕状態)に分つ。⁽⁶⁾

この種の構想は16世紀ジャン・ボーダン(1530—1569)がその著「共和国の六書」(1576)において、人類発展の三時代(宗教・政治・経済の各時代)を説き、それらに対応する経済活動を狩猟および農耕、また植民活動と手工業の勃興、最後に商業活動をあて、各時代の経済の特質を比較したことがある。この階段思想はかれにつづくフランス啓蒙思想家によつて継承され、とくにチュルゴーやコンドルセーなどによつて「人間精神の進歩」と解釈され、その法則化が提唱されたことは改めて説くまでもなからう。ケネーは若年期のチュルゴーの「人間精神の連続的進歩に関する論考」(1750)の影響を受けたのであろうか。⁽⁷⁾ その「自然権」(1765)において、社会進化の各種の過程における人間の自然権の展開の叙述を通じて、狩猟・漁猟・牧畜・農耕・商業の段階的生起を説いている。群居民族の人間生活は「土地の野生植物」の探索に始まり、狩猟漁撈で生活する。更に牧畜・農耕の段階に入る。その際、かれは群居民の性情を描写して、「このような人間は沙漠の蛮人とみなさるべきであつて、彼等は土地の自然的生産物によつて生活するか、それとも奪うべき富をもつ諸国に侵入しうるなら、やむなく強盗の危険を冒さねばならないのである。けだし、かような状態においては人間は富の所有権を保証する後見的権力がないために、農業によつても牧畜によつても富を獲得し得ないだろうからである。」⁽⁸⁾ といひ、さらに発展の最後の段階たる農耕定住の段階に進むと、社会状態の時代が始まり、各地方の住民の間に信頼ができ特殊の民族をつくり、共同防衛に徹し、個人相互の身体的安全・住民の所有権が確保され階級の発生をみると考える。⁽¹⁰⁾

アダム・スミスもまたこの種の階段的順序を国家経費の説明に托して明かにし、(1)狩猟民族 (2)牧畜民族 (3)農耕民族 (4)工業および商業民族という発展系列を把えている。そのさい、かれはケネーと異なり群居民族を狩猟民と牧畜民に二分し、発展段階をより明確にする。⁽¹¹⁾ さらにかれは資本が経済の発展動力たるを認め、その投下の順位によつて、農業・工業および外国貿易の発展段階を導入した。「事物の自然の行程によれば、成長しつつあるすべての社会の資本の大半は、まず農業について製造業に、そしてすべてのうちで最後に外国商業にむけられる。この事物の順序はきわめて自然なものであるから、いくらかでも領土をもつすべての社会において、つねにある程度はみられてきたとわたくしは信じている。とにかく、かなりの都市が建設されうるには、そのまえにそれらの土地のうちのいくらかが耕作されていたにちががなく、またそれらが外国商業に従事することを適切に気づきうるようになるには、そのまえにそれらの都市において、製造業に属するある種の粗悪な産業がいとなまれていたにちがいない。」⁽¹²⁾

かように、ケネーやスミスには経済発展の段階を位置づける努力が認められるが、これを一つの発展法則として定立するまでに至っていない。

(5) Peter Resch, Die Entwicklungsstufen der Volkswirtschaft. Graz u. Leipzig. 1886. Vorbemerkung. S.3.

(6) Kellenberg. ibid. S.260.

(7) A. R. J. Turgot, Tableau philosophique des progrès successifs de l'esprit humain. 1750.

J. A. N. Condorcet, Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain. 1794.

チュルゴーとコンドルセーの歴史観に就ては。出口勇蔵氏「経済学と歴史意識」昭和27年版 149頁以下。

- (8) Benedikt Güntzberg, Die Gesellschafts- und Staatslehre der Physiocraten. Leipzig. 1907. S. 138. なお、進歩思想の解釈につき、チュルゴーとケネー学派に若干のずれがある。前者は漸次的進歩を過去のなかに実証せんとするのにな、後者は過去に未来の保証を認める。S. 50.
- (9) F. Quesnay, Le Droit naturel. Oeuvres. p. 368. 島津・菱山両氏訳「ケネー全集」第三巻66頁。
- (10) Ibid. p. 373. 「ケネー全集」第三巻74頁。
- (11) Adam Smith, Wealth of Nations. Cannan ed. Vol. II. p. 186 ff. 大内氏訳「国富論」(註)2頁以下。スミスは牧畜民族の性格をもつて狩猟民族より恐暴性大であると指摘する。この点ケネーからの引用文と対比されたい。
- (12) Ibid. Vol. I. p. 359. 水田氏訳「国富論」(河出ペーパーバック版)昭和38年 248頁。

III

これらの一連の階段系列を発展法則として把握するに至ったのは、周知の如くフリードリッヒ・リストに始まる。

リストの階段説は「歴史の実用主義」(エドガア・サリーン)といわれる。それは恐らくかれの階段理論が独逸の経済政策に目標を与え、その理論的支柱となつたことを指すのであろう。当時の独逸は小邦群立し政治の虚脱・経済的貧窮その極に達し、漸く国民的統一の気運を盛りあがる状態にあつた。リストの「政治経済学の国民的体系」(1844)はかかる歴史的背景のなかで、独逸の経済学はケネーやスミス学派と異なり、「事物の性質と歴史の教えと国民の必要の上に打立てる」べきであり、その中心理念は国民のそれであつた。この国民の理念は優れて歴史的形成物と考えられ、各国民がその独立を維持し発展を計るためには、経済的に全国民の物質的・精神的生産力の結集を行い、またその高度の実現は実に農・工・商業の偕調のなかにおいてのみ行われる、とみるのである。当時この最高の階段にあるは英吉利のみであり、他国は遙かに劣るといふのがリストの評価である。生産力の階段的乖離の事実こそかれの発展階段説の出発点である。リストはこれを温帯の正常国民の経済が未開(狩猟・漁撈)・牧畜・農業・農工業および農工商業という順序をもつて発展すると説いている。そのさい注目すべきは一の階段から他のそれへの発展は「一定の条件の前提」(ブルノ・ヒルデブランド)を充すことによつて行われるとの所論である。⁽¹⁵⁾この条件を充す促進力はかれによると、国家の経済への干渉事項である。⁽¹⁶⁾当時独逸はアメリカと共に第三の階段にあり、関税制度の設定を通じて最高にして最後の農工商鼎立の階段に進むべきであると主張した。関税制度はかかる最高階段への移行促進の政策手段である。ここにひとは「階段的移行に必ず飛躍の論理」を認むることができよう。⁽¹⁷⁾或はまた経済政策の過失は発展的移行を阻むことにもなるであろう。⁽¹⁸⁾リストの主張せる保護関税による目標の達成はかような過渡的施設をして新階段の生産力に適應せる自由貿易政策と交替せしむることになるであろう。経済階段と経済政策とは相互に制約する、といえる。⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾

リストのこの階段説はふつうスミスや英国史から、或はまたかれがアメリカにおいて見聞せる体験から抽象したものといわれているが、英吉利の発展は必ずしもこの順序を追うものではなく、貿易と植民地の領有が工業を繁榮に導いたとみられ、⁽²¹⁾また独逸では「農業階段と農・工・商業階段の間の過渡期として対外貿易なき階段は経験的規則としても、独逸経済史上の一時期としても認め難い」といわれる。⁽²²⁾リストの階段説のアクセントは序列的発展のか

ような経験的・歴史的継起の実証的証明にあるのでなく、特殊の政治的要求に⁽²³⁵⁾応ずる証明手段であり、弁護の根拠として用いられたとみるべきであろう。

- (13) List, Ibid. S.7. 邦訳上巻 21頁。
- (14) List, Ibid. S.177 邦訳上巻 271頁。
- (15) なお、リストに次の言がある。「一国民が工業の最高階段に到達するためには一切の必要な諸条件を結合し……」Friedrich List's Werke. IV.S.545. zitiert bei E.Salin, Lynkeus. Tübingen. 1963. S.338. Anm.
- (16) List, Ibid. S.177. 邦訳271頁。「完全な工業力や有力な航海業や大規模な外国貿易は国家権力の干渉によつてのみ獲得せられる。」(傍点は引用者)
- (17) 板垣氏, 前掲書 431頁。
- (18) エドガア・サリンはリストの階段移行を説明して、「諸国民の未開状態から牧畜状態への移行は牧畜状態から農業状態へのそれと同よう、最もよく文明諸国民との自由貿易によつて惹き起されるのに、それ以後の前進は一定の国家的保護を必要とする。」Salin, Ibid. S.302.
- (19) Kalveram, Ibid. S.80.
- (20) Kalveram, Ibid. S.82および拙稿「ブルノ・ヒルデブラント」松商論叢 第10号(昭和37年)229-8頁。
- (21) Güther Bähge, Die logische Struktur der Wirtschaftstufen. Meisenheim am Glan. 1962. S.15.
- (22) リストの歴史観の性格を J.N. Keynes は次の如く断ずる。「リストはその『国民経済学体系』の筆を歴史に起している。その歴史は多くの点において確実であり、興味あるものであるが、多少の非難に当るものがある。すなわち、それは特定理論に照らしつつ読まれた歴史である。そしてその理論は後に至つて大いにその歴史を基礎とする。」J.N. Keynes, The Scope and Method of Political Economy. Third ed. London. 1904. p.286. 浜田恒一氏訳「経済学の領域及び方法」(昭和15年)265頁。
- (23) Kalveram, Ibid. S.83.

IV

ブルノ・ヒルデブラントはリストと同じく経済階段説を一の歴史法則とみなし、国民経済学の主要課題を発展法則の証明であると断じ、しかも経済的生成の発展法則を把えるため実物経済・貨幣経済および信用経済の三階段を主張した。同時に信用経済のなかに「現在の社会的害悪を救済する有効な救治策」⁽²⁴⁾の潜めるを認め、貨幣経済から信用経済への発展のもつ実践的重要性を指摘した。そのためかれを経済史家としてまた社会政策論者としての二面において把える必要がある⁽²⁵⁾。

かれの三階段説はフランスのサン・シモニスト、ジュール・ペレール Jules Péreire のそれに近いという。ペレールは財の交換を実物交換・売買ならびに信用による三階段に分ち、交換経済の発展の思考をその中心におく。「支配的な貨幣制度あるいは信用制度は交換の過程において生産の均衡を妨害する。妨害の契機は交換を二つの購買活動に分割し、不均衡の支持台となつた裂め目を造つた貨幣^{エレメント}それ自体であるか、或は交換手段が自然的理由ないし政治的理由によつて制約された不足による緩慢な循環のためか、そのいずれかである。」⁽²⁷⁾この提言の解決は貨幣の現実の形態が循環の正しい評価と財の分配を不可能にするから、一挙に貨

幣を廃止するに如くはない。貨幣の廃止は利子の支払を要しない信用によつて代えればよい。かかる発展の最高の形態（信用経済）は弁証法的運動の経過のうち⁽²⁸⁾に実現する。じつじつ^{ライフェ}貸借は交換と交替し金属貨幣の職務を引受けるというのである。

この交換三階段の継起はかくペレールによつてその原型が与えられ、貨幣経済から信用経済への移行の動機を貨幣経済の害悪に求める点もヒルデブラントの認むるところである⁽²⁹⁾。両者の相異はかれの背景となつた独逸資本主義の新状勢の展開であつて、次の如く説かれる。「貨幣経済においては地主や工場主は一労働者の喪失を他の労働者によつて補充し、かれの支払う貨幣賃金に対しては最も有利な労働者を選択することができる。しかも彼等をその健康の日々に使用し老年に至つて解雇する。才能ある者は才能少き者を、大資本家は小資本家を、小資本家は無産者を圧倒する。かくて生活の新しい動きを自己に有利に利用する貨幣支配と資本支配を導入する。あらゆる社会勢力の争い、また国民の道義心を放置する限り、弱者の敗北・無産者の没落に終る闘争が発生する。かようにして再び新しい貨幣経済的困窮が成立する。このため救済手段を許されるは第三の経済形態たる信用経済のみである。」⁽³⁰⁾

かれは信用の道義的要素を主張するが、単にそれだけでは経済的説得力をもつわけではない。「かかる対人信用、むしろ道義的信用が形成され、それが銀行や現在スイスの貯蓄金庫……貸付金庫、或は独逸の貸付金庫や信用組合の如き⁽³¹⁾信用機関によつて実現されると、資本家の独占は揚棄され、有産者と無産者の懸隔は除去されよう。人間の道徳力は資本力を有す。所有の能力はまた無産者に移転される。篤実にして能力ある労働者は資本家の如く自ら企業者となり賃金のほか^{ベツツ・レント}所有賃料⁽³²⁾を受けることができる。」といい、信用に社会問題解決の期待を寄せていたのである。

次に経済発展の過程が実物経済・貨幣経済および信用経済を経過するという連続性の問題であるが、それは必ずしも直線の上昇の過程でない。それは「精確に年代的に区別されているのではない。反つて漸進的の推移によつて発展する。それは一切の偉大な歴史的理念の如く変化する。一階段が凋落すると次のものが既に広く勢いを獲得し始める。各階段は先行のそれと相反をなし、そしてその完全なる実現は歴史的闘争の結果であり、その闘争において古きは徐々に新しきものに征服される。」との論述である⁽³³⁾。ゴットフリート・アイザアマンはこの思考様式を「かれの経済階段の宣言よりなお重要な、歴史的理念としてヒルデブラントの利用せる弁証法の証明である」といい、更に「かかるヘーゲルの弱い影響はなお明かに過去の二段階の一のジンテーゼとしての信用経済の叙述に現われている。」と解釈するのである。なるほどこの三階段の展開は正反合の統合様式を⁽³⁵⁾踐む解釈を許しはするが、各階段の相異は原理的・実質的のそれである筈であり、それぞれは当時かのロツシャーによつて、「確かに文化の向上に従い、信用は絶対的かつ相対的にますます大なる意味に到達したことは、たといそれが中世において特に諸の生活形態のうち⁽³⁶⁾に無数の信用業務が行われたとしても真実である。が、それ以外ヒルデブラントの三つの相反は全く並列していない。現物交換と貨幣での購買が個々の場合に互に鋭く排斥するのに、現物或は貨幣を給付するとの約束が中心となつていないところでは、如何なる信用活動も考えられない。貨幣経済時代においては或は交換用具としての貨幣の職務は信用によつて大部分補われるであろう。だが、価値の尺度としての貨幣はなお常に信用自体の基礎たることに変化はない。」と非難し、信用経済を貨幣経済の一段階たるに⁽³⁷⁾すぎずとみている。

ペレールは信用経済を財と信用との交換と文字通りに考えたが、その支配的経済形態とし

ての交換経済の階段はなく、かれの信用経済の構想は一種のウトピイとしてせいぜい幻想的な未来像とさえ評価されている。⁽⁸⁸⁾ところがヒルデブランドはこの階段に社会改革の実践的希望をかけながら、なおそれを史実に照してその可能を証明せんとするのである。かれはロッシャーの批判に対し、「英吉利でのこの世紀の初め約束手形の利用が漸増的に発展している事情は対人信用の漸進的發展を証明する。また多少ともグラスゴーやチューリッヒ州の実業活動に注意を払う人はそこの現在の工業の繁栄が最近の対人信用の発展に基くことを知るであろう。1895年チューリッヒ州に存在し年々およそ4500万フランの絹製品の産出を行つている95の絹織物工場はこの40年間の始めにはみんな財産をもたず仕事を始め、一步一步今日の工場経営までのし上るに至つたが、それはただ対人信用のおかげである。またチューリッヒの絹商人の間には原料絹を年歩6%の利子で9ヶ月の信用で売却する商習慣が確立したため織物工場主はその製品を原料代の支払い以前に売却するに至つている。」と述べ、独逸のシュルツ・デリッチの信用組合の活動を敘し、それらは「対人信用が高度の経済的文化階段において初めて栄えある発展に達することの十分なる証左であろう。」と応えている。⁽⁸⁹⁾

かれはすすんで階段説をたんに歴史研究の選択的補助手段とするに満足せず、「国民経済的経験の変化のうちに進歩を論証し、人間の経済的生活のうちに人類の完成を論証する」⁽⁴⁰⁾役目を見出さんとし、「人類の教育に就てのレッシンゲの思想は宗教とそれに近似せる精神文化の領域のみならず人類の国民経済生活にもその適用をみいだす。」⁽⁴¹⁾(傍点は原文)として、チュルゴー・コンドルサーに想源をもつ「人間精神進歩」の思想に同じているのである。

- 24) Bruno Hildebrand, Die Nationalökonomie der Gegenwart und Zukunft und andere Gesammelte Schriften. Gehrig Ausgabe. Jena. 1922. S.356.
- 25) Bähge, Ibid, S.19 und S.20.
- 26) Jules Péreire, Lecons sur l'industrie et les finances. Paris, 1832. p.3f.「社会における生産物の流通は三つの様式で行われる。すなわち、物々の直接交換により、売買により、更に信用によつて行わる。第一の様式では生産物は何らかの媒介なくして互に交換されるだけである。第二の様式では生産は貨幣に対し交換され、第三のそれでは貨幣は期日に償還する約束によつて代替される。」Bähge. Ibid, S.18.
- 27) Valentin F. Wagner, Geschichte der Kredittheorien. Wien. 1937. S. 95. Zitiert bei Bähge. S. 19.
- 28) Bähge Ibid. S.19.
- 29) ヒルデブランドが経済階段説の重要性を認識したと賞揚したブルードンは信用のこの社会政策的性格を否認し、それどころか「貧乏を止揚し得ず、反つて富者の資本を増加する」と説いたという。Hildebrand. Ibid. S.250. なおResch. S.122. Fussnote.
- 30) Hildebrand. S.350
- 31) Resch. Ibid. S.114. なお大河内一男氏、「経済思想史」第二巻(昭和33年)97頁。
- 32) Hildebrand, Ibid. S.354f.
- 33) Ibid, S.335.
- 34) G.Eisermann, Die Grundlagen des Historismus in der deutschen Nationalökonomie. Stuttgart. 1956. S.161.
- 35) 田辺元氏「哲学入門」(全集版)第11巻211頁。「弁証法というはいつでも矛盾を通じて、反対を媒介にして自己を主張し肯定するという考え方である。だから簡単には、いつでも何かを肯定するといふときは否定の否定の形で主張するということになります。」

- ③6 Alfoms Dopsch, *Naturalwirtschaft und Geldwirtschaft*. Wien. 1930. S.115ff. zitiert bei Bähge. S.24.
- ③7 W. Roscher, *Die Grundlagen der Nationalökonomie*. 1854, Stuttgart. 1922. S.287.
- ③8 Bähge. *Ibid.* S.78.
- ③9 Hildebrand, *Ibid.* SS.356-7. Fussnote.
- ④0 *Ibid.* S.309.
- ④1 *Ibid.* S.357.

V

リストとヒルデブランドとは經濟發展の原動力となり推進者となるは国家（リスト）であり、「人間精神の創造力と自由」(ヒルデブランド)⁽⁴²⁾であると、共に人間こそ發展法則の実現を導くものとみるのである。ところが、ウイヘルム・ロッシャーのそれはあらゆる現象の背後にあつて、「發展法則を創出するは解明し得ざる神の想念」⁽⁴³⁾に基くとなすのである。

ロッシャーの發展法則はかかる信仰の上に立つ外歴的・形而上的特徴を帯びてい、その支柱的理念は有機体的の理念である。かれはいう。各国民は一の巨大な有機体（人類）の一部であり、国民生活の一面をなす国民經濟を営み、国民經濟それ自体固有の發展過程を辿る。国民經濟の發展は国民や個人のそれと同じく出生・壮年・老年・死というが如き有機体的循環をもつて進む。新階段は古き前階段からの継続を意味し、その發展は必ずしも直線的に行わるわけではなく、時として以前の基礎に立歸る曲線を描くことがある。かような循環は人知を超え人間の窺知し得ない「一の威大なプラン、奇蹟的なもの、すばらしく取り出された神意 Ratschluss Gottes」⁽⁴⁴⁾の指向するところであり、人間は僅かにそれに従い行動するに過ぎぬ。結局ロッシャーがフィヒテやアダム・ミュラーから受けた有機体論理を援用し、生物有機体の發展過程の類推によつて説明するほかに、しかもこの有機体概念すら最も不可解なものに属すると評されるに至つた。⁽⁴⁵⁾国民經濟はその成長を国民と同じく開花し結実する。開花期は国民生活のあらゆる重要な機関が充実し完全なる調和を示す。やがて国民經濟は国民と共に凋落の道をたどる。国民經濟のこのような動向は一国民の、またその歴史の一時代に限つて考察すべきでない。すべての国民のそれを比較し各時代の相異を明かにすべきであり、かくしてそこに「国民經濟の發展法則」が措定されることになる。⁽⁴⁶⁾

ロッシャーはかかる有機的・生物学的發展法則に従い、その經濟階段説を自然・労働と資本の三生産要素の関係から、各国民の經濟發展史を三時代にあとずける。初期の時代では自然が支配的であり、第二期の中世後期では労働が支配的となり、第三期に入るに至つて資本が表面にあらわれる。土地は資本の投下によつて生産力を増し、工業では手工業は機械工業に交替され国富は累進的に増大するというのである。⁽⁴⁷⁾

ところが、この階段説では各階段がそれ自体もつ特殊の構造を指示する面もなく、而も一階段から他のそれに進む過渡期を与えられたものとして經濟發展の法則的移行を示すに止まり、⁽⁴⁸⁾發展の行われる理由や發展の推進に就ての説得力ある説明を期待するわけにはいかない。

この点はカール・クニースにおいてもほぼ同様であり、經濟發展は人間の精神的要素（自由）を起因とし、またするがために「再び過ぎ去つた階段に復歸する循環の形をとつた變化

でなく、持続的に新階段に進みゆく発展」とみるが、⁽⁴⁹⁾ 経済発展の形態は国を異にし民族が異なるに従い、それぞれ特有の性格をおびる。従つてこれを人類一般のそれに拡大し各国民経済に一樣に妥当する発展法則を樹立すべきでない、とみるのである。ここにかれのリスト・ロッシヤーらの発展理論に対する批判の根拠がある。リストの階段説は諸国民が平等の自然的基礎を前提とするため階段順序の顛倒さえみいだされるといい、⁽⁵⁰⁾ ロッシヤーの有機体類推や三生産要素の有機的構成の高度化にそう自然経済・労働経済・資本経済の分類に対しても同様であると非難する。特に最高の発展階段たる資本経済においてなお自然力と労働力の高度の協力を要請する事実がある。⁽⁵¹⁾ またヒルデブラントの実物経済・貨幣経済・信用経済のうち、後の階段に対立の純粋性を認め難く、⁽⁵²⁾ 信用経済の階段を否定する。クニースはかのように経験的生活の一般的図式化はいずれも常に細密研究の多様性と具象性とを洞察せしめる結果となると論じ、かれ自身の経済階段説の提言を断念するに至つた。

- (42) Hildebrand, Ibid. S.307. 人間精神の自由こそ文化の発展と経済生活の発展を生み出すものとみる。Kalveram. S.68.
- (43) Kalveram. Ibid.S.64. なお、ロッシヤーの言に、「宗教なければ他の一切の最深の理義と最高の目的とを欠くに至ろう。」とある。Roscher, Ibid. S.41.
- (44) Roscher, Ibid. S.835.
- (45) Eisermann, Ibid. S.141.
- (46) この際、かれは諸国民の経済発展を帰納的・比較的に論証し、かれの比較法を提唱した。
- (47) Roscher, Ibid, S.131.
- (48) Kalveram, Ibid, S.87.
- (49) Karl Knies, Die politische Oekonomie vom geschichtlicher Standpunkte. Neue Auflg. Leipzig. 1930. S.358.
- 50) Ibid. S.364.
- 51) Ibid. S.375.
- 52) Ibid. S.384.

VI

以上で、旧歴史学派の中心学説の一つである経済発展階段説のささやかな展望を終えたが、かつてクニースに就て試みた要約をここに引用し結びの文字としたい。

この階段説は単なる歴史的・発生的研究につきず、時代の要請に応ずる実践的理論の性格を具えた点を指摘しなければならぬ。リストはこれに後進国の生産力増強の政策理論の到達点を求め、或はヒルデブラントの如く「国民の信用力を普及し無産者を除去する」場⁽⁵³⁾(銀行)を見出さんとした如きそれであろう。

第二にその歴史的方法がリストのほかは有機体的地盤において把えられたことであり、あらゆる生ける発展は連続的である」(クニース)が、その担い手をいずれも国家や国民に求め歴史の動きを統一的に把握する。かれらの歴史解釈は国家の有機的諸生活の発展を通じて国民経済の発展を認識するのであつて、ロッシヤーやクニースにその論証を求めることができよう。

第三にかれらの歴史的方法の背後には歴史哲学的思考が伏在せることを注意しなければな

らぬ。かれらが発展法則にふれる場合、それと形影相伴う思考はロッシャーにあつては「老衰し死滅し得る有機体として各民族というイデー」⁽⁶⁴⁾であり、ヒルデブラントやクニースでは人類進歩の理念である。それは「われわれの背後にある歴史にはいかなる停留所もない。そこに、われわれは新しい諸国民がかつて得た文化の所産の完全な白地^{ヌブ-ラ-ラザ}のうえに、以前とは異なるまったく新しい共同生活を建設したのをみる。……かくの如きは諸国民の歴史的発展に挿入された部分であり、各国民の生死を越えて人類の歩みは止まることなく前進し、われわれじしん自己を高低つねなき波浪のうちにみいだす」⁽⁶⁵⁾確信である。

52) 拙稿、「カアル・クニース」松商短大論叢第9号（昭和36年）247頁以下。

53) Resch, Ibid. S. 122f.

54) シュムペーター「経済学史」中山・東畑訳（昭和36年）263頁。

55) Knies, Ibid. S. 152.